JTA通信 第2号

道楽は職業となり得るか？

発行日：2025年5月20日

はじめに

こんにちは、高本です。

幻かと思われた第2号でございます。初めにこまごまとした話題に触れつつ、最近更新した記事の振り返りと2つの話をお送りします。

【ティカモト研究所】
先月ぐらいからブログやこちらでも言及していますが、最近哲学史を振り返ってます。で、consense というサイトにちまちま勉強したことをメモしたりしてます。consense は、ページ同士だけじゃなくてフレーズもリンクでつなぐことができます。デカルトの話をした時にそのページの下部に、他にデカルトについて書いたページが並ぶようになってます。

ある程度熱が冷めてからまとめようとしても、そのまとめるために必要な熱量すらも落ち着いてしまってるので、今やってるその瞬間ごとに人が見ることのできる形として書いていく、というやつです。これまた今年入ってから出てきてる感覚でかなり使い勝手がいいと思ってます。

というわけで、まとまってなくてガタガタでもとにかく前に進んでいく感じで全然オッケーというのを現在やってますので、暇すぎて他に何もやることない時にでも覗いてみてくださいw

▸哲学史ノート

【本の編集中】
今月は本の編集もやっていまして、月末リリースの予定でしたが、間に合うか怪しげです。で、その原稿を読み返してた時にちょっと気になる話してるのを発見したので、この後紹介します。

【notebookLM】
この前 notebookLM というのを知りました。Google が提供してるサービスで、資料とか会議録を投げておくと、それをソースとして要約したり質問に答えてくれます。なんですが、それに音声概要という機能があって、その資料を対談形式のポッドキャスト風にしてくれます。これがめっちゃおもろいのですw

僕は基本的にはずっとイヤホンで音楽とかラジオを聞いてるんですが、勉強とかちょっと知りたいことがあるときも音声から入ることがあったりします。kindle の読み上げで適当に流し聞きしたりとか。

で、音声だと手が使えなくても受け身でもよくて非常に楽なので、僕がいろいろ書いてる文章も音声で聞いてもらえるようにしたいなと思ってたんですね。人によって目と耳どっちが優位かという

違いもあったりするらしいです。そんなわけでちょうどいいサービスですねえということで、試しに前に書いたレポートとかプロフィールの文章とかを音声化してみたらなかなかいい感じにまとまっていました。

その中で去年の９月ぐらいに書いてた雑多なメモを投げてみたんですが、これがかなり面白くて。内容が、ということではなくて、例えばレポートや記事は多少広がりはあったとしても基本的なテーマは１つです。でもそのメモは一か月間気になったこととか思い浮かんだことをひたすらGoogleドキュメントに上から書いていってたんですね。で、それを使って何か書こうとか最初は思ってたんですが、散らばりすぎて全然無理でしたw

なんですが、この notebookLM を使うと、全体をいい感じに整えてくれるのです。というわけで、こちらがその去年のぐちゃぐちゃのメモから生まれたポッドキャストです。素粒子、人類学者マリノフスキーの方法、人間と物語、ハンターハンターとかの話です。
▸ 2409note_podcastメモのポッドキャスト.wav

ちなみに前回のニュースレターの音声化も出来ました。
▸ JTA01_podcast.wav

以下、今回の内容は次の3つです。
・最近更新した記事の振り返り
・基礎練習を面白がれる人面白がれない人
・夏目漱石の『道楽と職業』と「シン・道楽と職業」

それでは早速！

最近更新した記事の振り返り

5/3 ちょっと面白い出来事があってもすぐにメモとして形にするのではなく自分の内側で発酵させたいという話

文章を書くことの面白さの一つに最近考えてたことが紛れ込んでくる、というのがあります。前はこういう話をしようと決めて、頭の中で構成を考えていけそうになったら実際に書いていく、という方式だったのですが、これだと書いてる途中に脱線的に思い浮かんだ話を切り捨てることになります。でもそのルートを外れていく感じにも読むときの面白さがあります。

「こんな出来事があった、だからそれについて書く」とはまた別に、「こんな出来事がありそれについて今こんなことを考えている」までで止めておき、違うこと書いてるときに、「そういえばこの前の話とつながるな」という感じで紛れ込んでくるのっていいですよね、みたいな話です。

5/5 やりたいことが分からない読書録5『14歳』千原ジュニア

千原ジュニアは「飲み会の時にも大喜利を仕掛けてくる」と後輩に度々いじられてましたが、この本でそのことがよくわかりました。

千原ジュニアはお笑いそのものが人生の軸と一致していたのです。通常、芸人といってもタレントやコントにあこがれを抱くなどいくつかのバックボーンがあるものですが、彼にとってそれはお笑いそのものだったのです。だから飲みの場で写真で一言をやってるときすらも、そうありたい人生を生きてるということなのでしょうw

5/8 自分の方法を作るとはどういうことか

弱さが創作意欲になるという話を以前したことがあるのですが、その人にとっての方法というのは、極めて属人性の高いものだと思います。ウィトゲンシュタインの哲学は、新たな発見や真理の追求ではなく、言語の御用からくる混乱を解消するものである、という意味で「治療としての哲学」と言われるようですが、そんな感覚に近いかもしれません。

心理学クシャのエレンベルガーはクリエイティブイルネスという言い方をしました。フロイトやユングは彼ら自身が精神の問題を抱えていたと言われています。それらを解消しようとする中で無意識や心理学の体系が出来上がったんじゃないかってことですね。

そしてその人に固有の治療の過程がその人の方法になり、同じような問題意識のある人にとっての近道となります。

5/11 往年の名選手の体の使い方が最先端の理論から外れてないことからも個人の感覚の重要性が分かりますよねと言う話

阪神の近本は打席に入る前、めっちゃゆっくりスイングするんですね。その時に体のパーツ一つ一つを意識していると言ってました。で、それは科学的にも説明がついて、自分がどの部位を使ってるかを意識にあげることで、通常よりも力が出るようになってるらしいんです。

で、その体の使い方も人によっていくつかのパターンがあるんですが、高木豊という大昔に引退した選手のスイングは、その理論から導かれるフォームにかなり近いのです。個人の感覚で、科学で説明されるところを捉えてるわけですよね。そこからいくつか考えられることがあります。

5/14 「音が好きになった、理論が好きになったわけではない」

これも感覚の話ですが、音楽家のジェイコブコリアーがインタビュー風の動画で話していたことについての記事です。コードの名前とかよりもこの音の響きが好きやねん、みたいなことを言ってて、面白いですw

名前が付く前にそこにあるものを大事にしたいですね。

5/17 やりたいことが分からない読書録6『ソース　あなたの人生の源は、ワクワクすることにある。』マイク・マクマナス (著) ヒューイ陽子（訳）

この本のソースの車輪という発想はなかなかいいです。やりたいこととかゴールについて、いくつかのジャンルに分けて考えるというものです。コーチングでは確かバランスホイールって言われてます。

例えば今はこれを勉強したいと思ったとして、それがずっと続いてていいのかってことなんですね。で、そうなると、いや今はとりあえずこれに集中してそっからはもっと自由に、とか考えがちなんですが、その「一個終らないと次に行ってはいけない」という感覚が窮屈にさせてしまう部分もあります。

それは未来の楽しみのために今を我慢するということで、人生や思考がフラクタルであることを思えば、この瞬間から断ち切らない限り、その勉強が片付いても次もまた「今はこれをやる時期やから、、」ということになってきます。

というわけで「全部一気にいっちゃいましょう！ｗ」というのがソースの車輪なのです。

基礎練習を面白がれる人面白がれない人

編集中の本の原稿で気になった話を共有してみます。

あるプロのサックス奏者は休みの日に一日中ドレミファソラシドを吹いているらしい。楽曲の練習ではなく、一見単調に思えることを淡々とやっている。で、これを知ったときに、やっぱり基礎的な練習が大事なんだなあ、ということもできるが、それよりも僕が思ったのは、その単調に見えることにおそらく面白さを感じられているのだろう、ということ。多分うまくなるために、楽しくないけど大事だから必死でやってるわけではないはずです。練習ではあるけど、でもそれ自体に面白さを感じてるから続けられているはず。で、それがその道に進んでる人ってことだと思うのです。

というのは、外から見たときに、というかサックスを吹いたこともない人からすると、ずっとそれをしていて面白いのかと一瞬思ってしまうわけですが、でもそこに面白さ楽しさを見出すことができるその感性がその道に進んでるってことなのだと思う。つまり、そうじゃない人に比べて、それに対する解像度が高い。その時間や行為から感じ取れる情報量が多いのだと思う。

僕はギターをやるときに、そういうドレミを繰り返すような練習はしないことに決めたんですね。それは一番最初に始めるときに、それをやってたらつまらなくて続かないだろうと思ったからなんですが、つまり、そういう単調な動作を単調としか受け取れないってことです。これを単調としか思えないのは、まずそこに楽しみを見出すセンサーがしょぼいってことです。僕の指とか脳とかのフィルターを通過してきたときに、最後に出てくる感情として、面白い、とはならないってことです。

でもそうじゃないやり方では楽しんでギターを続けてはいられるわけです。僕の友達もギターをしばらくして始めたんですが、彼は割とすぐ飽きて止めたんですね。ということはギターについては僕の方がそこに面白さとか、そういう刺激をキャッチする力というのか分かりませんが、それは高いってことになる。

ただ、歌についてはあまり気持ちよく歌えたことがなくて、でもその友達は上手でカラオケでも非常に気持ちよさそうに歌ってます。歌に関しては僕は面白さを感じ取る細胞はしょぼいんだと思います。だから楽しい面白い気持ちいいっていうのは、それとの向き合い方がうまいというか、セ

ンスがあるということなんじゃないかと思う。多分人それぞれ何に刺激を感じやすいか、それも対象が何か、という以外にもそれとどんな角度から接すると面白いと感じるのかは違っていて、だからいい一日を過ごすというのは、その一日との接し方一日という情報空間上の多様体があったとして、浮いてたとして、それと、その時間ごとにどの角度から向き合うのか、という感覚。

x軸上に乗っかって、そっからyz平面で切断するように見てみるのか、原点から右上を見上げるように対峙するのか、今日が面白くないっていうのは、今日という塊から、それも時間ごとのイベントが連続的に集まったものですが、それから刺激を受け取りやすいポジションを選ぶのが下手ってことなんです。

じゃあその今日から受け取る刺激をなるべく多く、つまりなるべくずっと気持ちよく過ごしていくには、部分的に区切ってどんなことをするのか、これとそれをまた同じようにどの角度から見ていくのか、向き合っていくのか、ということになる。

例えば、ギターならどうやって取り組めば自分にとっては楽しいという刺激が最大になるのか、ということであるが、もっと言えば、その対象ごとに、というよりは、個人として、自分として、そういう刺激を感じ取りやすいアプローチというのがあるはずです。そういうことをわかっていくのが、この言葉は好きではないけど自己理解というやつなのではと思う。

そしてこの能力が高くなると、自分を楽しませる方法が分かるってことで、こいつに退屈させないようにもう一人の自分で環境を整えてあげればよくて、そうすれば今動いている自分は非常に気持ちよく過ごせるわけです。それを見つけるのが試行錯誤であって、だからいろんな経験をしろとか、いろんなやり方を試せ、とか言われているはずで、それは気持ちいいポイントを探すってことだと思う。それがエネルギーの源泉を見つけるということでもある。

これまでやってきたことはそれに面白さを見出す力が高くて、やってないことは楽しいポイントの当て感があまりよくないってことなのである。で、この当て感をひっくるめて遊び心というのではないかと思う。つまり、遊び心というのは、そこから面白さを見つけ出す力というか、面白い形を見つけようとする精神性でもある。僕たちはこの能力が非常に低い可能性が高い。それは学校教育の過程で多分そうなるもので、学校では与えられたことをそのまますることで評価されるのだから、向き合い方の自由度が低い。

指示されたことを逸れて面白そうなことが見つかっても、もうあと2mすすめばエネルギーの源泉があることが分かっても、そこに立ち入り禁止の標識が立っているのが学校である。だからいつしかそれを見つけようとしなくなり、面白くないのが当然で、やりたくないけどやる必要がやるのが当然で、せっかく何次元にも広がるそれという多様体であって、どこから見てもいいし、毎日見る角度を変えればそのたびに面白い発見があって、違った風景を味わえて、どんな風にも形を変えられるというか、目に映る模様は変わるのに、原点に棒立ち状態で、何の面白みもない一枚絵を毎日眺めているだけなのだ。そしてそれを普通と思っている。裏側に回ればもっとカラフルな世界があるのに。

複素多様体かもしれない、虚軸方向にも広がっているのだ、何も実軸だけが現実ではない、現物をそのまま受け取るだけがそれをするということではない。目に見えない触ることのできない部分にもその活動は広がっていて、そっちに入っていけば、隣のやつとは違った形の面白さを発見できる。そしてその冒険そのものを面白がることが、探求するということであって、それがドレミファソラシドを吹き続けることなのだ。それの何が面白いのか、と切り捨てるのは実軸しか知らないやつの意見である。ちなみに僕はドレミファソラシドを面白いと思ったことはない。

夏目漱石の『道楽と職業』と「シン・道楽と職業」

夏目漱石の『道楽と職業』が面白いです。ネットで検索すると出てきますし、kindleでも無料でダウンロードできるのでぜひ読んでみてください。

何が面白いのかというと、このブログでも何度か言及している自己実現と他者貢献について書かれてるところがあるんですね。ここってたびたび問題になるところで、例えば芸能人とかタレントなら、素の自分とタレントとしてのキャラのバランスが難しいとか、芸人だったら自分がやりたいネタと求められるネタのギャップとか、ブログなら書きたいこと書いてると読まれないが、読まれること書くと自分が楽しくないとか。とにかくいろんなところで出てきます。

これについては、やりたいことが誰かにとっての面白いこととか役に立つことになるように必死で考えるのと、逆にエネルギーの源泉から日々大量に溢れてくるものを流し続けているうちに、それをありがたがってくれる人が現れるという、両方の矢印があると思っています。

でもこの感覚がわかりづらいところで、なんというか、やりたいようにやるけどやりたいようにやるだけではなく、人のためになることを考えるけど人のためになることだけを考えるのでもないわけですよね。で、この辺りに関してかなりしっくりくるニュアンスで書かれていたというわけです。

己のためにする仕事は人のためにする仕事と同じ

まず、みんな独立したいものだと言ってます。といっても「自分の事業をもって～」という文脈ではなく、「人に頼らなくても自力で生活をしていける」という意味の独立です。

「人から月給をもらう心配もなければ朝起きて人にお早うと言わなければ機嫌が悪いという苦労もない。生活上寸毫も人の厄介にならずに暮らして行くのだから平気なものである。」

でも実際にはそんなわけにはいかない。主食の米ですらスーパーで買う人がほとんどです。

これを夏目漱石は、

「自分の力に余りある所、すなわち人よりも自分が一段と抽（ぬき）んでている点に向って人よりも仕事を一倍にして、その一倍の報酬に自分に不足したところを人から自分に仕向けて貰って相互の平均を保ちつつ生活を持続する」

と言っております。

だからこそ、

「己のためにする仕事の分量は人のためにする仕事の分量と同じであるという方程式が立つのであります」

というわけです。

まさにこれです。自分の中で抜きんでた力があって、または普段の生活の中で余りあるほどに溢れているものから報酬が発生し、それで自分の力では対応できない不足を補うのが生活、ということです。

自分のためにする仕事について

その抜きんでた力、または余りが生まれてくる分野って、よく言われるところの「得意なことや好きなこと」です。周りより楽しむ力があるから勝手にやってしまうものです。そういう意味で抜きんでてるから毎日毎日やたらとやってしまう、なんなら自分でも当たり前すぎて気づいてないことすらあるかもしれません。分かりやすくすでに認知されている形ある何か、でもないかもしれません。そういうものが人それぞれ普段の生活の中でぼこぼこ生まれていってるわけです。

それは別に人のためにやってるのではありません。自分が面白いから、やらないと気が済まないから、ぐらいのことです。自分が満足するために、自分のためにやってます。でもだからこそ、それはもう余りに余っていらないぐらいに溢れ出し、だからそれをいくらでもあげることができ、それが人のためになることがあります。だから「己のためにする仕事の分量は人のためにする仕事の分量と同じである」と言えるのです。

中学生ぐらいの時にニコ生を見てたりしたんですが、人によっては別に何をするでもなく毎日7，8時間ずっと配信してたりする人がいるんですね。僕たちはそれが面白いので見るわけですが、でも本人からすれば別に人のためにと思ってやってないはずなんです。youtubeみたいに広告が付きもしなければ、投げ銭があるわけでもありません。暇で配信が面白いからやってるわけです。こっちが勝手に面白いと思って受け取っています。

もちろんやっていくうちに、エンタメ性を意識して視聴者を楽しませようと思うこともあるでしょうが、「おもろいから勝手にやってる」のがベースで、その上で、「多少綺麗な紙に包もう」「丁寧に手渡ししよう」というわけです。

今回の話も、面白そうなタイトルの本があり、その場ですぐ読めたから読んでみたら、ちょっと言いたいことが出てきてしまい、スマホにメモして終わってたらもったいないので、せっかくなら他の人も読める形にしておこう、という感じです。

だから面白いと思って持ち帰ってもらえたらもちろん嬉しいですが、別にそうならなくても僕の中では本を読んで感じたことを書き残したその時点でもう終わってたりします。そこまでゴールテープを切っていて、あとはウイニングランです。

まあ、実際はそこまで言ってしまうと若干嘘が混じってきまして、せっかくなら読んでもらいたいところではありますがw、でも「人のために」ということだけを一番上に掲げて本を読んでるのでも文章を書いてるのでもありません。結果論的な部分も大いにあります。

人のためにする仕事とは、人を教育したり導くことではない

「人のため」の部分に関しても面白い感覚が書かれてます。

「そこでネ、人のためにするという意味を間違えてはいけませんよ。人を教育するとか導くとか精神的にまた道義的に働きかけてその人のためになるということだと解釈されるとちょっと困るのです。人のためにというのは、人の言うがままにとか、欲するままにといういわゆる卑俗の意味で、もっと手近に述べれば人の御機嫌を取ればというぐらいのことに過ぎんのです。人にお世辞を使えばと云い換えても差支ないくらいのものです。」

これ面白いですよね。ここの感覚が書かれてるのってなかなかありません。いろんな本やら記事やら見てきましたが、一番しっくりくる言い回しかもしれません。

よくブログを書くときに、「昔の自分に書くように」とか「人の悩みを解決するように」とか言われますが、この夏目漱石の感覚が一番近いです。人のためにって思うと、偉そうな感じになってしまいがちなんですね。かといって偉そう加減を抑えてしまうと、それはそれで「これは誰のためのどんな話やねん」みたいなふわっふわの仕上がりになったりします。

だからそこのスタンスというかバランスが難しいわけですが、これが一番ちょうどいいです。教えてやろうとか導いてあげようではなく、「ご機嫌」です。「おもろいことあったからシェアします」「この問題をこう考えてこう解決したのでその話をここに置いときます」という具合に、勝手に出てきたものをちょっといい感じにコーティングしてお届けするというわけです。それを夏目漱石は「ご機嫌を取る」という言い方をしてるのです。

職業の自分本位と他人本位

で、この職業ということを考えると、どうしても他人本位にならざるを得ないという話が出てきます。

「例えば新聞を拵えてみても、余り下品なことは書かないほうが良いと思いながら、すでに商売であれば販売の形勢から考え営業の成立するくらいには俗衆の御機嫌を取らなければ立ち行かない。要するに職業と名の付く以上は趣味でも徳義でも知識でもすべて一般社会が本尊になって自分はこの本尊の鼻息をうかがって生活するのが自然の理である。」

つまり、商売としては人の鼻息を伺わざるを得ないということです。

一方で、他人本位にならない職業として「科学者と芸術家」をあげていて、そのあとしばらくしてこんなことを言ってます。

「けれども私が文学を職業とするのは、人のためにするすなわち己を捨てて世間の御機嫌をとりえた結果として職業としているとみるよりは、己のためにする結果すなわち自然なる芸術的心術の発見の結果が偶然人のためになって、人の気に行っただけの報酬が物質的に自分に反響してきたのだと見るのが本当だろうと思います。」

自分本位に取り組む中で誰かが御機嫌になった分が自分の分として返ってきたということですね。

というのが、夏目漱石の『道楽と職業』なんですが、せっかくなので、もう少しここでよく議論しているような文脈で考えてみます。

職業とはもっとも楽にエネルギーを集めることのできる方法のことである

ここで職業をただお金を稼ぐという意味で考えてしまうと、考えが縮こまるというか必死の形相になってしまいかねないのでw、もう少し広げてエネルギーを稼ぐと考える方がおもしろい。

職業とは、自分にとって最も自然にエネルギーを集めることのできる方法のことである。
それは同時に、最も自然にエネルギーを届けることのできる方法である。

こう考えたときに、夏目漱石が他人本位にならない職業として挙げた二つの職業、科学者と美術家以外に、もう一つ出てきます。

それはよく言うように、エネルギーの源泉から湧き出したものを流していくパターンです。人生の軸から分離しない形で考えていくわけです。どこかに持て余すぐらいエネルギーが溢れ出すポイントがあって、自分はその湧きだしたエネルギーでノリノリになれるわけです。

いくらでもやってられるし、そっちに進む中でまた新たに源泉を発見して、次はこっちをもっと探検してみよう、次はこっちが気になる、という形でどんどん行く先々でエネルギーを補給して半永久的に進んでいきます。たぶんそれを数十年繰り返し、死に際になって振り返ったときに、それがその人の人生だったということになるのだと思います。

これが道楽ですが、このエネルギーを形あるものに変換して外に出すことで、そいつの近くにいればなんか心地いいぞ、とパワースポットのようになってきます。常にエネルギーは湧き出ているので、ちょっと整えるだけで、周りの人が認識できる状態になります。彼らが受け取ることのできる形に翻訳できます。

それが、書き、語り、歌い、弾き、踊り、描き、笑うということです。種類こそ人によれど、無限に供給できます。いくらでも排出できるのだから、そのうち誰かが近くにやってきます。このとき、そのエネルギーの源泉は個人に閉じたものではなくなっています。みんながひしゃくですくって自由に浴びれるのです。これが道楽から職業に移り変わる最初の段階であるはずです。

80億冊のベストセラー？

そういえば、ちょっと前に本書いたことを友達と話してたんですが、買わせてくれってその場で買ってくれました。どういうつもりで書いたとか、もともと想定していた文脈で興味を持ってもらったわけではありませんが、でも逆に言えば、世界中の人とそういう関係であれば、80億冊売れるわけですよねw

人間関係も楽しさもノリも全部エネルギーであって、常にお金とも移り変わり得えます。だからと言って、別にそのために人付き合いするわけでは当然ありませんがw、僕たちから発せられる言葉や態度は、お金を含めて他のあらゆるエネルギーとも交換され得るということです。

物理的に言えばポテンシャルです。ポテンシャルが大きいというのはもっこりしてるってことで、そこにボールを置けば、すごい速さで転がっていき、下に段ボールでも置いてればドーンとぶつかって動きます。そんだけの仕事がなされます。

そこに人がいればどうでしょう、少しずれた場所に運べます。精神的には心が動くということです。運動エネルギーが喜びのエネルギーに移り変わったのです。そしてその嬉し楽しい感じが、購買という次なる運動のためのエネルギーに変換されることもあるというわけです。

結局は、僕たちが一人一人とどんな関係を築いてきたか、またはこれから築いていくのかということになります。

まとめ

ということで最後は盛大に脱線したわけですが、この本で最も大事なところは「己のためにする仕事の分量＝人のためにする仕事の分量」という方程式です。これがすべてで、その上で、だからと言って人に伺い立てなくていい職業として科学者と芸術家が挙げられていました。

なんですが、もう一声ということで、職業を「最も自然にエネルギーを集める（届ける）ことのできる方法」だと拡張してみると、エネルギーの源泉をベースとする第三のルートが現れます。

僕としてはこれが一番面白いのではないかと思っています。

おわりに

というわけで今回は、序盤のこまごまとした話、記事の振り返り、基礎練習を面白がる感性、夏目漱石の『道楽と職業』についてお送りしてきました。

質問や感想などあれば連絡してください。必死のパッチで返信してます。
次回は5/30の予定です、それでは！